はじめに

近代化が最大の目標だった戦後、そして高度成長期には、都市における祭礼は活気を失い、その存続が危ぶまれるものも多かった。ところが、豊かな時代を迎え、人々の心に余裕が生まれた今日、むしろ祭礼は息を吹き返し、各地で活発になってきている。

祭は地域の歴史と深く結びつき、またその空間構造と密接に関係しながら演じられる。しかも祭の際には、ふだん隠れているコミュニティの社会関係ばかりか、空間構造が明確に視覚化される。そこに、町や地域のアイデンティティが濃厚に表現される。

従来、祭礼は民俗学、文化人類学の分野で、しばしば研究対象に取りあげられてきた。東京の祭に関しても、その分野での研究は少なくない。しかし、さらに建築的、あるいは都市論的発想で視点を場所、空間、風景の問題にまで広げるならば、祭を通じて、町や地域の構造をより深く理解することができよう。

本研究では、東京で現在、行われている主な祭礼を実地に調査し、その比較を行いながら、祭礼と都市空間との関係について分析、考察する。東京の都市空間を“祭礼”を通じて読み解くことにもつながる。また、そこから今後の町づくり、地域づくりにとっての重要な示唆が得られることも間違いない。

本報告書は、石川貴洋の修士論文『伝統的祭礼にみる東京の都市空間構造に関する研究』を基礎として、より大きな枠組みの研究として改め直したものである。

研究組織

●研究指導者・責任者　陣内秀信　法政大学工学部建築学科教授

●研究分担者　石川貴洋　首都圏総合計画研究所
柘　和秀　法政大学工学部建築学科修士課程